

P6 骨格型乳歯反対咬合の早期治療 — 器械的装置および機能的装置の臨床的考察 —
Early orthodontic treatment of mandibular protrusion in primary occlusion
— clinical analysis of mechanical orthodontic appliance and functional jaw orthopedics —

○齊藤紋香¹⁾ , 大野秀夫²⁾ , 宮本理恵²⁾ , 牧 憲司¹⁾
Ayaka Saitoh , Hideo Ohno* , Rie Miyamoto* , Kenshi Maki

九歯大・小児¹⁾、 おおの小児矯正歯科（下関市）²⁾

Division of Developmental Stomatognathic Function Science , Department of Growth and Development of
Functions Science of Health Improvement , KYUSHU DENTAL COLLEGE

*Ohno Pediatric and Orthodontic Dental office in Simonoseki city

【目的】骨格型乳歯反対咬合の早期治療に器械的装置および機能的装置を使用した症例を 1 例ずつ経験した。その治療経過および問題点など臨床的に比較考察したので発表する。

【症例 1】初診時 4 歳 8 ヶ月の女児。骨格型反対咬合。Mand.Len.(Cd to Gn)91.1 mm。
Harvold-Mcnamara Triangl において Mand.Len.125.2%。

装置：バイトブロック型 Rapid Expansion 装置と High Pull Head Gear 付きフェイシャルマスクを使用。

前歯部交叉咬合改善期間：3 ヶ月。

【症例 2】初診時 4 歳 0 ヶ月男児。骨格性反対咬合。Mand.Len.(Cd to Gn)95.1 mm。
Harvold-Mcnamara Triangl において Mand.Len.130.5%。

装置：ムーシールド®

前歯部交叉咬合改善期間：1 年 0 ヶ月。

【症例 1,2 の前歯部交叉咬合の改善について】

2 症例ともに下顎骨の clock wise の回転および上顎乳前歯の唇側傾斜および下顎乳前歯の舌側傾斜によるものと思われた。しかし FMA の変化は症例 1 では 25.0° から 26.0°、症例 2 では 30.0° から 31.5° に変化していた。

【まとめ】症例 1 および 2 ともに各装置を骨格型乳歯反対咬合に使用して良好な結果を得たものの、治癒形態において症例 2 は症例 1 と比較して下顎骨の clock wise の回転が大きく認められた。